# 学びの場があふれています

「新規感染者の伸びが、鈍化する一方、重症化する高齢者の増加に対策が追い付かない状況が続き、政府は警戒を強める。」

どうでしたか。あなたは何問正解しましたか。読むことと書くことは違います。読めても書けるとは限りませんが、書ければ大抵は読めますからね。どちらを鍛えればよいかは、明らかですよね。

「昨日の十問はどうだった。」

「かなり書けたと思います。」

「『ドンカ』って書けた？」

「わからなかったので、辞書で意味を調べました。」

今朝、ある生徒と交わした会話です。「ドンカ」がわからなかったので調べたこの生徒は、主体的と言えますね。意味を調べてまで問題に挑戦してくれたことを、私は大変うれしく思いました。

しかし、それで満足していてはいけません。わからない言葉に出合った時に、意味を調べることより先にやるべきことがあります。それができると、意味を調べる必要さえなくなるかもしれません。

それは、「ドンカ」の意味と漢字を、文脈の中で見つけることです。

「一方」の前の部分と後の部分の内容は、対照的なものとなっているはずです。前の部分には、「重症化する高齢者の増加」について述べられているので、それと対照的と考えると、新規感染者は増加の反対ではないかと予想がつきます。

前の部分には、増加と反対のイメージであると意識して読むと、「ドンカ」の意味が徐々にわかってきます。そして、「ドン」と読む漢字が「鈍感」の「鈍」だとひらめきます。「カ」は「～のようになる（する）」という意味の「化」ではないかと連想できます。

これが、文脈を読むということです。「言葉の意味を覚える」のではなく、「言葉の意味をみつけ出す」のです。漢字はアルファベットと違い、意味を表す文字ですのでそれができるのです。できるならやるべきです。それが国語の力になります。

「先生、『ジセイ』ってどういう字？」

「『自生』だよ。その言葉の前に植物のことが書かれているでしょ。」

「えーっ、そんな簡単な字なの！」

国語の実力テスト後に、テスト監督に入った私に質問した生徒が過去にいました。私の返事を聞いてかなり悔しがっていました。「自生」という言葉は、学校生活ではほとんど使いませんが、市内には、ハナノキやヒトツバタゴ（別名　ナンジャモンジャ）の「自生地」がありますからね。調べて覚えるべき言葉だとは言えませんね。

「学習」と言っても、机に向かって取り組むものばかりとは限りません。生活の中には、学びの場があふれています。私の文章を読むことも勉強になってくれるとうれしいと思うのですが……だったら、勉強になる文章を書かなくちゃね！

（二月十八日　記）